

LED「光ったよ」

5年生が風力発電学習

地元企業が製作指導

黒石・追子野木小

黒石市の追子野木小学校(佐藤一省校長)5年生32人が22日、工作の授業で、ペットボトルとモーターを使った風力発電機作りに挑戦した。児童は、同校付近にある小型高性能モーター製造業「UNO」の宇野禎倫社長に教わり作った発電機の発光ダイオード(LED)が赤く輝くと「光った光った」と歓声を上げ、風車の回転方向と電気の極性の関係を学んだ。

(木村 歩)



風を受けて赤く輝いたLEDに歓声を上げる児童と、様子を見守る講師の宇野社長

同社はロボットや鉄道を製造。同校は、5年1組組長を学ぶことから道模型用モーターなどを生が理科でモーターの「モーターを手掛ける」と宇野社長に講師を依頼した。

社長はモーター技術の基盤となるコイル巻き取りの熟練技能者として県の「あおもりマイスター」に認定されており、引き受けた経緯について「市内に自社製品を持つ開発型企業があることも知って

ほしかった」と話す。宇野社長は児童に「モーターがあれば発電できるし、コイルと磁石だけでも発電できます」と原理を説明。児童はペットボトルを6枚の羽根に加工し、LEDをつないだモーターに取り付けると扇風機に当てて試運転した。光が弱かった児童は、羽根の角度を調節して風車が滑らかに回転するよう工夫した。点灯しなかった児童は、羽根の向きを逆にして解決。宇野社長は「電気にはプラスとマイナスがあり、風車が逆に回ると電流も逆に流れて(極性が決まっている)LEDはつきません」と説明した。児童は「なぜ羽根が回る方向で光ったり、光らなかつたりするのか説明を聞くまで不思議だった」などと感想を発表した。

2013年2月24日

陸奥新報 朝刊